

海気通信

18号

2025/4/1

発行

千葉市民ギャラリー・いなげ

〒263-0034
千葉市稲毛区
稲毛 1-8-35TEL:043-248-8723
FAX:043-242-0729<https://galleryinaga.jp/>

稲毛とさつまいも、アルコールのミツな関係

JR 稲毛駅のすぐ近くには、昭和50年代までさつまいもを原料としたアルコール工場がありました。稲毛に古くからお住まいの方からは「昔は駅前に、さつまいもの発酵した匂いが漂っていたよ」というお話をよく伺います。今回は、千葉のサツマイモやそれを原料としたアルコール工場、稲毛との関係についてご紹介します。

さつまいもはどこから来たの？

さつまいもの原産地は、メキシコを中心とする熱帯アメリカであるとみられています。日本へは、フィリピン、中国、琉球王国を経由して薩摩に伝わり、17世紀頃には九州地方を中心に栽培されるようになりました。その後、江戸時代の度重なる飢饉によって、飢饉をしのぐ為の救荒作物として注目され、全国に普及していき

「芋神様」のおかげ

さつまいもの普及を語る際に避けることのできない人物が青木昆陽です。元禄11年(1698)



①青木昆陽肖像画(菊澤栄一・画)

てさつまいものに注目し、享保18年(1733)にさつまいもの特性や栽培法を説いた『蕃語考』を著し町奉行・大岡忠相に提出しました。その翌年、8代将軍・徳川吉宗の命令で、江戸城の吹上御苑や小石川薬園(東京都文京区)、不動堂村(現・千葉県山武郡九十九里町)、馬加村(現・千葉市花見川区幕張町)でさつまいもの試作を行い成果をおさめ、その功績が高く評価されました。

その後、昆陽はオランダ語を学び「蘭字の祖」とうたわれ、明和6年(1769)72歳で亡くなりました。現在、京成幕張駅の目の前には、さつまいもを広めた昆陽を「芋神様」として祀った昆陽神社があります。またその近くには、昆陽がさつまいもを試作したとされる場所があり、千葉県指定史跡となっています。



②青木昆陽甘藷試作地(県指定史跡)

さつまいもデンプン製造

の発祥の地・千葉市

さつまいもやじゃがいもからとれるデンプンは、主に料理にとろみや弾力をつける材料や甘味料などに使用されていますが、実はさつまいもデンプンの製造は、千葉市が発祥の地。天保7年(1836)に千葉寺村五田保(現・千葉市中央区稲荷町)の花澤紋十が始めたと言われています。

江戸時代は、芋洗いや摺りおろしなどが手作業で行われていましたが、明治に入ると機械が導入され、製造能力が向上。その後、蘇我町今井地区(現・千葉市中央区今井1-3丁目)で機械の開発や改良が進められたことで、さらに生産量が増え、千葉ではデンプン製造業が重要な産業となっていました。またデンプン製造業の増加に伴い、水飴や糖類、アルコールの生産などのデンプン加工業も発展。デンプンの多くは、千葉市中央区新宿町にあった参松工業に納入され、水飴やブドウ糖などに加工されました。



③参松工業 千葉工場(昭和33年)

スクープ!

神谷傳兵衛とも関係が!?

明治・大正時代、日本中にワインや洋酒を広め、稲毛に洋館別荘を建てた実業家・神谷傳兵衛は、神谷酒造株式会社を設立し、アルコールや焼酎の製造事業も行っていました。蘇我町今井地区のデンプン製造業者が共同で組織した「今井共益会」より、焼酎の原料としてデンプン粕を購入していたことが、『千葉県誌』に記されています(千葉県・昭和43年(1968)発行)。

さらに稲毛浅間神社にほど近い、「千葉市ゆかりの家・いなげ」は、中国清朝最後の皇帝の弟君・愛新覺羅溥儀と嵯峨浩が新婚の頃に住んだ和風家屋として保存されています。この建物は元は東京の水飴商である「笹屋」が建てたものでした。水飴はさつまいもなどのデンプンを原料としていますので、このようなことから、稲毛がさつまいもデンプンと深い関りがあったことが分かります。



④千葉市民ギャラリー・いなげ敷地内に現存する日神谷傳兵衛稲毛別荘(国登録有形文化財)



⑤千葉市ゆかりの家・いなげ(千葉市地域有形文化財)入口には笹の文様も。

稲毛のアルコール工場

昭和の初めになると、石油をはじめとする燃料は欠かすことのできない戦略物資となりましたが、当時の日本では大半を輸入に頼っていた。昭和12年(1937)アルコール分90度以上のものが、国の専売事業となりました。当初は、ガソリンに規定量を添加して使用していましたが、燃料事情が悪化すると共に徐々に添加量が増え、最終的にはガソリンの代用として広く使用されました。国専売のアルコール工場は、原料の産地またはその近くの都市から選ばれ、全国で13の工場が建設されました。

そのうちのひとつが稲毛の工場で国鉄(現・JR総武線)と京成千葉線の間の台地の上に建てられました。またJR稲毛駅の線路が高架になる以前には、アルコール工場からの引き込み線が伸び、原材料や製品を貨車で輸送していました。



⑥国営千葉アルコール工場(昭和40~50年代)

研究所もありました

稲毛にはアルコールに関する研究所もありました。昭和15年(1940)、アルコール工場の目の前に「大蔵省千葉酒精工場附属研究室」が設立し、アルコール製造の技術開発や微生物の研究等を行いました。

その後、通商産業省に所管換えし、「酒精研究所」、「発酵研究所」、「微生物工業技術研究所」と名前を変え研究が続けられました。昭和55年(1980)には茨城県の筑波研究学園都市に移転しています。



⑦かつて研究所があった場所は、現在稲毛東公園となっている。

●本号は、西川明氏(元千葉市史編集委員)を迎え開催した「いなげお話し会part15」と、千葉市立郷土博物館発行「甘藷先生の置き土産」(2023)、千葉県発行「千葉県甘藷発展誌」(1968)などの内容をもとに編集しました。

●画像は①幕張公民館②千葉市教育委員会生涯学習部文化財課③④千葉市立郷土博物館よりご提供いただきました。皆様ご協力ありがとうございました。